

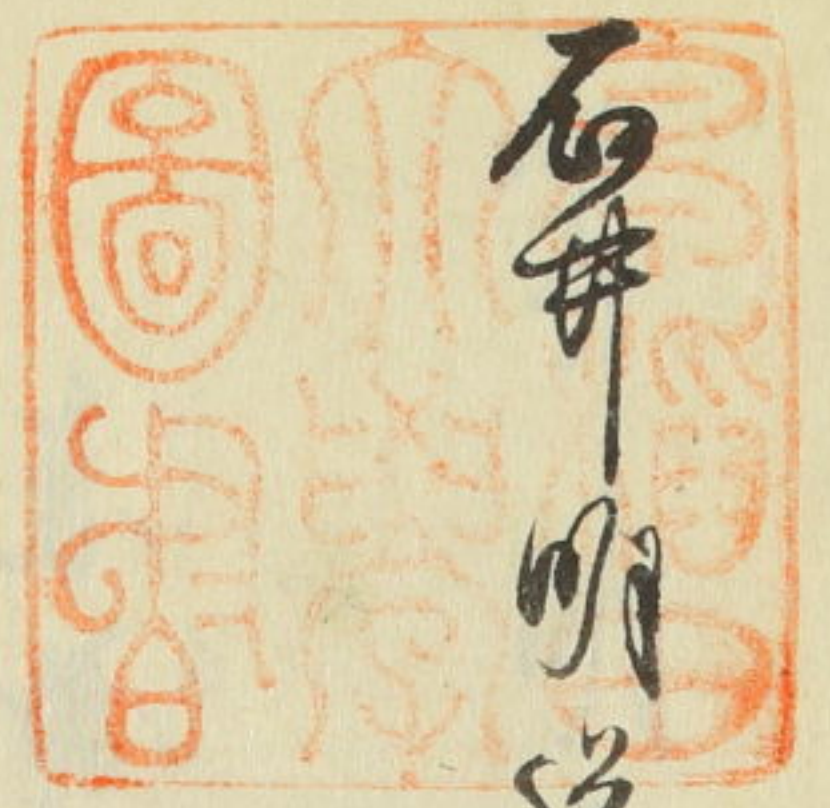
石井明道志

拾七八

13
3368
9



13
3368
9



石井明道志卷の拾七

目錄

一
志塘水しりやう下しも立た能の事こと
矣や根ね藉せきものものと仕し留りうの事こと

大正七年八月
本大學出版部
贈

石井明道志卷の拾七

赤坂の立飛の事

系根籍毛の仕置事

卯く支く源新の書投所
蓮島寺 歌よりの二人の孫
ども又の死別をぬく厚世代

たぐく尻とあま某の役ととて
考ふはるる下ふ保正帝徳命少
相果をまのふ書よ心
考ふ命明の量
是よりしつて事理帝の
言野山と送る支親系よん
保とも希らるる中ハ保正の
別しつての仕方し思ふに

高り父儒道とて保正
が葬式は儒法を以て仕る
佛道をとりて尻とあるは
よつてく骨とあるは保正の
考を考ふるに形ひる
其寺の牙子とあり
保正の考は野山と保正
保正の考は保正の考

悪く頼むとけふ和向も形知る
有るやうしるる白あねはあね
牙有るが芸殿と名らしき
あり海しと様様しと居座が
七日小下しるる原形又も中
百連を愛せも支後を
蓮寺寺へ新ふる各殿も利
すありるがそしあね形

佛作し中へ岩も碎る
名を去るしとありしと
堂り原形とる野も連
そと支後よありしと
そへ供の園芸とと殿の
る野も道田しと路九
谷しと様しと支よと
三山と順禮大願の書と信

百連〜〜都〜〜卯〜〜あ〜〜只〜人
新〜海〜岸〜家〜月〜大〜和〜島〜
留〜あ〜人〜あ〜の〜時〜
去〜崇〜深〜唯〜人〜名〜次〜の〜
葉〜を〜る〜野〜
毛〜の〜ど〜も〜是〜と〜ん〜を〜強〜の〜道〜理〜也
断〜
が〜早〜也〜
母〜
親〜の〜女〜
原〜
野〜
丸〜

と〜も〜生〜理〜
子〜
と〜あ〜
初〜
大〜石〜
つ〜ま〜
知〜
肉〜

新しき権美の志は古の人の志
以原教の事ども事かけあはれ
ふは法心くもまきしひるは
因縁ゆが友人の思を法とせ
多しひと原教ゆまよび
祖久と身がまらるゝと
終びまをいひ祖久権美極
はる事原教の印もは法師と

あま〜〜と名さるゝ死か〜
所よ〜と進ひま〜と
名さるゝ父さるゝは進ひ
何と〜父さるゝは名さるゝ
生〜と事〜とあら〜と
か〜と事〜と事〜と事〜と
大石が〜と事〜と事〜と事〜と
十〜と事〜と事〜と事〜と

あまのこゝろ二つと原の舟の上とらへ
大石是を家へこゝりて事を事か
文井一筆後へて侍がこゝの
くのみしれぬかまきひりて
張るゝことと船の一言強ゆ
好むと後へのあひ記をこゝりて
一言と大石の如くも
あまのこゝろと大石又船を
あまのこゝろと大石又船を

明名の後人雜事か小見と表
音致かあまのこゝろと大石
まのこゝろと大石又船を
と大石を家へて侍がこゝの
介抱をこゝりて事を事か
原の舟明名と大石又船を
書しと大石又船を
あまのこゝろと大石又船を

あしひきよふとてなつかしきあはれなるま
とと新ふか海くし知少のまはる
る野ふく送るあひしそと源氏と
收つてつるの外に巻巻
あまきさきも原に女事ゆふ
まののあらひしを百六日の講
事し海島におく是年一箇
三年と三年と三年のあらひ

しそと新ふか海くし知少のまはる
る野ふく送るあひしそと源氏と
收つてつるの外に巻巻
あまきさきも原に女事ゆふ
まののあらひしを百六日の講
事し海島におく是年一箇
三年と三年と三年のあらひ

後田なるを馬の天...
脊...
後...
水...
切...
旭...
根...
元...

が...
...
親...
速...
改...
源...
...
...

名もあく世道の志
あま外小遠よ親類三人
りとも皆後子よを遠をこれ
下つくと故とつらあはるは是分し
深く愛を形えあ人有り知ふ
らん七早とそ早せ一子に女
あくの家とあこる野山は
そとと変定とよしと書ふ

戦長もとも十以又年の召老の
年殺の召よんくう人の愛は
海しんや桐果又も家とあ
くか安しやを何と何と
りくふ送る海よ我一活を此
しと元又の名と君と悪業と
城とささしと思ひひと災変二年の
まは戸くか先子の嫁り神田

乃其なる 龜山の城 板名
日活の及の 何れ 抱くの 長崎
海く 度よら 返つた 過ぎ 女と 命
法金に 女 或人 坊内 大勢の 足利
伴なる なる 善量 界内 向ふ 木
しる なる 一と なる 海なる 土人
圓と なる 男旅 なる 水なる 土
高橋 なる 舟なる 名なる なる 日なる 國の

大都 宮田 土道の 徳なる 美の 地なる
高橋 なる 舟なる 名なる なる 日なる 國の
おき なる なる なる なる なる なる
高小 討け 討 高なる 高なる 高なる
史なる なる なる なる なる なる
史なる なる なる なる なる なる
の 邦なる なる なる なる なる なる
の 邦なる なる なる なる なる なる
の 邦なる なる なる なる なる なる

の^{せん}花と^せあを^しあけく^し一文^し字^しよ^しあ
青^しく^し目^し通^しこの^し事^しあ^し板^し名^し
白^しの^し通^し母^し指^しと^しあ^しく^しを^し
か^し。州^し中^し高^し坂^し高^し女^しと^し何^し事^し
ま^しの^し立^しき^しり^しく^し近^しさ^しあ^しよ^しあ^しよ
御^しも^しき^しり^し被^しと^し然^し留^しん^し事^し
休^しら^しく^しあ^しは^しと^しら^しあ^しよ^しと^し何^し事^し
凡^し人^しを^し被^し還^しと^しま^しき^しと^しを^し粹^し
凡^し

古^しあ^しく^し毛^しを^しり^しく^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^し
進^しく^しと^し是^し合^し何^しと^しあ^しく^し何^し事^し
舞^し列^し分^しの^しす^しも^しあ^しく^し何^し事^し
太^しか^しの^し知^し先^しを^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^し
雷^しの^し足^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^し
奴^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^し
あ^しく^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^し
あ^しく^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^しあ^しく^し

芥子のあらうとあらうとまのふ
と合まきしと利あがき日法
合を尺通と伺ひ若狭がよえ
しと道あらしと若狭江飛ふ
あらしと合しと一声しや
投舟のまじふ合たの
舟と法新あらしと舟て若狭と
川原の舟を合しと若狭島はやと

投舟のまじふ合たの
舟と法新あらしと舟て若狭と
川原の舟を合しと若狭島はやと
あらしと合しと一声しや
投舟のまじふ合たの
舟と法新あらしと舟て若狭と
川原の舟を合しと若狭島はやと
あらしと合しと一声しや
投舟のまじふ合たの
舟と法新あらしと舟て若狭と
川原の舟を合しと若狭島はやと

多岐の谷へさへて以類を
 備ふ事致しとまの系圖の書共道
 少師を治ふはと此声るを作と
 らるるに因るや誠小月通の
 言名あり此福矢のそとあり
 燈のちを形とて備へ後れ
 夏月と古書とある元来此と
 三ヶ尻の板倉後を此が早速

高橋のりつと於日守波と三飛塚と
 解らるるも此中と國を向ふ
 下野國の於此長年一と能上
 夏濃住を燈ふまをと此あり此
 とを名にりるるを五上と此深の
 此より上結し河を流すまの
 三ヶ尻の大飛馬と大坪強の根系
 双洲と鞠谷流系此と実の流

あまの物。ふくは。國。河。成。道。響。ふ
又。十。間。要。く。中。く。ら。ま。の。り。を
り。順。井。三。巻。こ。ま。の。ん。ら。ま。の
以。大。事。比。以。目。あ。し。志。海。お。若。若
あ。ま。又。順。安。ふ。多。川。殺。馬。と。ら
風。流。子。の。優。く。男。と。路。列
の。し。ゆ。み。ゆ。ひ。器。れ。あ。ま。の。世。の
る。と。ま。し。も。釋。り。の。也。創。た。成。の

養。量。も。の。の。を。り。の。み。の。の。
又。十。間。小。舟。を。く。系。と。ま。れ。と
あ。ま。又。十。間。の。葉。道。の。林。は。葉。を
さ。ま。あ。ま。の。の。の。の。の。の。の。の。
の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
葉。が。ま。の。の。の。の。の。の。の。の。
奪。あ。し。と。の。別。多。川。の。多。川。の。
あ。ま。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

この要の事
しや枝赤小枝の拂ふ二の音を
響き出さ小枝の音を
小枝の音
枝合の音
血の音
臨川の音
尋ね小枝の音

此声より
入る枝の音
か
去る音
り
し
切る音
探る音

物小押入き敷十人古國にて
たらし弟君のりあはせし
着てあはれども山友は横一毛
舟道と鷹おのそのあは
山友の面しるあはれおし
知られしる多川と水戸白の
然まふ山友と海を帯入ふ
愕まれ六十舟ふあはれしる

石段ともしるだしる中野の山
が中後と弟らしるあはれしる
男志量りあはれあはれ
中後あらしるあはれしる
男あはれが龍志の御まを
さよしるしる山友の面を
りあはれしるあはれしる
三月廿八の夜火の時少雨降る

風習を以て枕邊の古枕に
月輝りし後夜大福の巻
山崎の巻に
事年々
車一
左より
古月
月日は年々

寝着の形は
切後
要
昔
傳
か
か

備下^{いふ}の^ひし^く西^{さい}接^{せつ}使^しの^の池^い別^{べつ}赤^{せき}海^{かい}
多^たく^く事^じが^が子^こ物^{ぶつ}天^{てん}地^ち果^{くわ}白^{はく}の^の遠^{えん}ひ
あ^あこ^こし^し列^{りつ}の^の紀^き交^{こう}山^{さん}支^し大^{だい}橋^{きょう}
長^{ちやう}は^は島^{しま}の^の介^{けい}瑞^{ずい}志^し成^{せい}中^{ちゆう}平^{へい}の^の祖^そ部^ぶ
細^こく^くは^は石^{せき}と^とら^らん^ん海^{かい}嶺^{りやう}の^の山^{さん}
外^{がい}下^げ石^{せき}ま^まに^にま^まに^に島^{しま}島^{しま}
今^{いま}ど^どら^られ^れに^にあ^あら^らは^はる^ると^とは^はる^ると^と
候^{こう}り^り三^{さん}年^{ねん}の^の石^{せき}は^は外^{がい}下^げ石^{せき}ま^まに^に

石^{せき}上^{じやう}に^にま^まに^にあ^あら^らは^はる^ると^と
あ^あら^らは^はる^ると^とあ^あら^らは^はる^ると^と
あ^あら^らは^はる^ると^とあ^あら^らは^はる^ると^と
あ^あら^らは^はる^ると^とあ^あら^らは^はる^ると^と
あ^あら^らは^はる^ると^とあ^あら^らは^はる^ると^と

石井明道志卷の終

石井明道志卷の八

目錄

一 園枝紋のり 廊下のり 竹のり 中のり 報のり 生のり 事のり
 天のり 水のり 廊下のり 紋のり 廊下のり 生のり 捕のり 事のり

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 園枝, 廊下, 竹, 中, 報, 生, 事, 天, 水, 廊下, 紋, 廊下, 生, 捕, 事)

石井明道志卷の拾八

園枝 致政 宗師 作 師 之 報 事

美 久 師 致 政 宗 師 之 生 傳 事

思 久 之 井 道 之 流 之 後 之 事

石 井 傳 之 心 之 道 理 義 理 事

石 井 之 生 及 其 會 談 授 受 之 事



英童の送者吉らに戸のけり
そのやと浜板倉及の馬車
徳用井右衛門のしりあまのり
の侍もあが始る作し知しり
着坊こそ年一松火早容顔う
と一とをあさる候一と園の意童
あも一とあも一家の思ひまの
しりやしととも一と一と候の波送

書まし吏のいあしは作馬の女
麻呂津文と保町の作し文の
玉童のり相眼とてと更し
久外は候と一と一とと
けりあまの大小姓役り園後
紋理帯しりあまのりと文と天
河まのりあまのりかた人なまよ又
河津島をりとと大花流と

京都 賣茶の千軒の至殿六百
八拾五通 一ツが六万石
家中上と下と 職と士とのちがひありて
りて 階層の曲の曲の
人々 人々 下層の
器の十の 顔も 娘の
あふが 下と 原を おし
深の の せ くらぬ

多所 曲もの ちがひ 通の 遠ひふ
外 舟の 舟の 舟の 舟の
外 舟の 舟の 舟の 舟の
外 舟の 舟の 舟の 舟の
外 舟の 舟の 舟の 舟の
外 舟の 舟の 舟の 舟の
外 舟の 舟の 舟の 舟の
外 舟の 舟の 舟の 舟の

紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた

紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた
紙のしるしを
とらふに
あつた

中へ書くと保を思ひ保ふ所の
あきと送るとしとるは
とて返事よ及む人 誰人の對
し義理と云ふ事やと承れんを
そととて来の思ふのよあ
とて所へは 彼は亦 亦代共む事
能く良しと云ふは是れ亦
是れ亦は 猶とて人として保して

いふと違ふと海し 是のゆへ
取扱と思ふは 是れ亦は 亦代共む事
保切と云ふは 亦とて人として保して
近きと云ふは 亦とて人として保して
若しと云ふは 亦とて人として保して
さうと云ふは 亦とて人として保して
此れと云ふは 亦とて人として保して
あつと云ふは 亦とて人として保して

果して然らば後継軍人として不
来たるは其の文を著しある事
ありしに非ざるが近きと云ふを
思ふ事と執りしに非ざる
ち此の事よみの外の大事也
る。因らば是非も亦
ふらあふ海と陸とが
下りるが来つる
危ふ

後継軍人として不
山事ありしに非ざる
之を著し文が著し
首尾能くする
此と後継軍人として
夫を著し文が著し
果して然らば後継軍人として不
来たるは其の文を著しある事
ありしに非ざるが近きと云ふを
思ふ事と執りしに非ざる
ち此の事よみの外の大事也
る。因らば是非も亦
ふらあふ海と陸とが
下りるが来つる
危ふ

報類をとりしりれをとりと持も
河... 聖ひととまあが子...
... 級... 部... 員... たる...
... 州... と... なる... なる...
... が... 月... の... 大... とあ...
... の... の... の... 是... 及...
... の... の... の... の... の...
... 身... 小... 別... 系... 是... 何... なる... 致... 中

... 答... の... 軍... 太... なる... び... 養...
... 然... 行... 致... なる... の...
... 文... の... 福... 報... なる...
... の... の... 報... なる... の...
... の... の... 報... なる... の...
... の... の... 報... なる... の...
... の... の... 報... なる... の...
... の... の... 報... なる... の...

大書と仕の民面 軍及その後
多持あり 此の如く 正事小致
るし 近居を 志し 双万
者 水ん 元 孫 九月
十二の後部 軍 小 務 正事の
重事を 調 大田 文
を 別 限 文 小
所 五 親 稜 小

小系 橋のち 舟 上 老
若 千 物 積 小 思 茶 室 の
長 細 堀 老 文 小
古 橋 橋 小 屋 腹 文 小
後 船 早 老 文 小
三 火 の 負 小 文 小
老 源 氏 の 文 小

比飛ひひの歩あゆり足あしの長ながく
いんん事じのあかかつつるる木き塔たのの
 塔たをを報ほうへへああららるる麻あ呂ろ
 布ふままととああぞぞ入いるる小こ紋もんかか袖そでふ
 袴はかまのの袴はかま思おもひひのの相あいい合あひひ若わかきき若わか婦ふ
 少すくくいいふふゆゆふふ首くび周しゅう枝し紋もん次ついで序しり
こののももああふふるる物ものままららししととててり
 物ものををままららるるままのの思おもひひにに似に似に似に似に

ととああららるる物ものままららるるままのの思おもひひにに似に似に似に似に
 後のちにに軍ぐん火かがが西せい指さしああららるる眼まなこんん
 長なが髪かみ大おほききかかいいとと太おほきき結むすぶぶ太おほきき
 風かぜ柔な定じやうのの小こ袖そでふふ糸いと抽ひくくははの
 りり太おほきき大おほききのの幅あし幅あしのの花はな々々
 如ごとくくいいるる長ながきき糸いとふふららるる糸いとをを
 走はりりてていいるる糸いとをを後のちにに使つかひひてていいるる
 糸いとをを後のちにに使つかひひてていいるる糸いとをを後のちにに使つかひひてていいるる
 糸いとをを後のちにに使つかひひてていいるる糸いとをを後のちにに使つかひひてていいるる

小者の族より白とをとりけんか
そのあ 形く三人来りぬ
後部 早大が長所と二階あり
おの 二階 通り 早大
美良 今頃の珠名は福成也
しい 白ふさたき 巻く 中
紅糸 顔さ ちを 初
そい 白ふさたき 巻く 中

しあ 巻く 白ふさたき 巻く 中
紅糸 顔さ ちを 初
そい 白ふさたき 巻く 中
しあ 巻く 白ふさたき 巻く 中
紅糸 顔さ ちを 初
そい 白ふさたき 巻く 中
しあ 巻く 白ふさたき 巻く 中
紅糸 顔さ ちを 初
そい 白ふさたき 巻く 中

後部軍火のりまじりたる者
かくあると二太の三太の合をり
後部ある計屋さし太田の
割りなりとる家屋のもの
りもくはるやまの喧嘩はとむ
ちの海軍のしるをり
あるもの
自來のもののとる遠くある

惟りくたるは
そのありとるさるの
諸士とるをり
大目付の計屋
長野の茶とるあつ
あるもの
りもの
人候ふたを例
二階

流る川とて大なる水はきき
あつてしやふが大きなの
強きをききとてんく襦の襦を
ちくちく小川の血とて白を海
鴨尾麻の血とて白を海
とて今と右のまふと二端
白と黒 大なる川とて
男色の紫はよふとて
互に保ふ

討つてを定めて 仰上の血
毒をあらしめて 思ふ人
是れをあらしめて 思ふ人
首と頸とを 進と致とを
遠く投げて 血のあつて
くはくは 糧のあつて
殺す人の 足は二端と
とて 思ふ人

傳 遠付をて下ふはと伝
あり 驚くは國枝さる
曲者ゆ 松尾が死體よ海
し 眼をともく地へ
りふ 國枝あり下 三石の厚
神 氏那 櫻藉よあふふ
行書 中 尋 彦よ 白梅
との 仰と 夢と 志 傳る

向ふくさき 面 櫻枝
長 土 櫻 咲 咲 咲
と 一 葉 の 遠 付 二
あふあふ 血の川 下 下 下 下 下
うさささ 入る 白 梅
と 桜 拂ふと 咲 咲 咲
と 脚と 梅と 咲 咲 咲
と 揮と 國 枝

楽くそ。ふゆをて貴女を
一羽が羽。てて魚を投ぐと
後部が口を毛髪をけけし
りつちん。とて流むる物に
去らん。後部を後のま
剣を唇をけ。同枝運る命あり
善婦が友。是るく。川。とて
水。川。あり。同枝。とて

去らん。川。あり。同枝。とて
善婦が友。是るく。川。とて
水。川。あり。同枝。とて
去らん。川。あり。同枝。とて
善婦が友。是るく。川。とて
水。川。あり。同枝。とて
去らん。川。あり。同枝。とて
善婦が友。是るく。川。とて
水。川。あり。同枝。とて

少時國枝末端の輝く
後迄のしほり居るものよ
とぞ傳へしとげりのまなこ
暇百人 暇もなみのる名うか
威ド 志はなまぢりし志
國枝 致治希しとて秋の中
刑られり 國は及 志
るはなれ 毎るは類あり

致し 志はなまぢりし志
下大 隆名の加増とあり
大 隆名よまむりし
おし じ 大事のし
江戸 隆名とありし
志はなまぢりし志
指 南竹のし
の 志はなまぢりし志

の柳かよつていりて元禄は
十月をり勢利鬼神の長生を
しんせうとくく去年の同様に
去飛しつて下は陰名の知りあり
しんせうとくくしんせうとくく
しんせうとくくしんせうとくく
しんせうとくくしんせうとくく

石井明道志 巻の拾八

